

【大齋節を迎えるにあたっての読み物】

～一年の苦行期間／レント [断食] ～

「断食」というと、イスラム教などがよく行っているといわれますが、キリスト教にもちゃんと断食の期間はありました。現在は飽食化していることもあり(?)、その厳しさは半減していますが、中世当時の人々にとってはそれは大変なイベントでした。もともと四旬節(レント)は新約聖書に登場するイエス・キリストの断食から来ています。

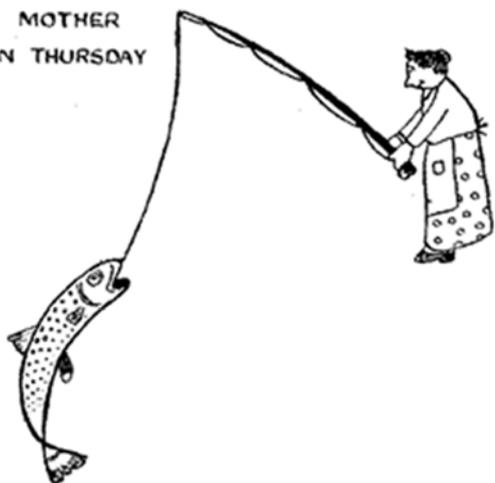
悪魔(Evil)が彼を陥れようと、様々な誘惑をけしかけてきます。40日間悪魔に耐えぬいたイエスは勝ち、巡礼の旅にでることを決意するのです。レントはイースターの40日前から開始し、イースターの前日まで続きます。人々はその間、いくつかの食べ物を食してはいけないことになっていました。特に愚者の食べ物であるとされる肉はすべてにおいて食することを禁止、たまごや牛乳も控えていたのです。そのうっぷんをレント前に晴らそうと、「四旬節」(カーニバル)という日がレント前に設けられており、その間は腹がちぎれんばかりに肉をとにかく詰めこんでいたそうです。この風習は現在でも引き継がれています。

魚介類(特ににしん)と豆類は食べてもOKだったので、にしんやそら豆と顔を合わせる毎日が続きました。今考えるとものすごくうんざりしそうな感じがしますが、当時の人々もうんざりしていたようです。特ににしんはかなり嫌われているらしく、「にしん」という言葉を含む皮肉な言葉も後になって多く作られました。(現在もヨーロッパでは昔の名残を残しているのか、にしん料理が多々登場します)

なぜ魚類は良いのかというと、旧約聖書に登場する「アダムとイブの裏切り」物語から答えが導くことができます。神の約束を破り、口にしてはいけないりんごを食べてしまったとき、地上にあるすべてのものに呪いをかけてしまいましたが、魚達だけは水中に生息していたので難をのがれ、呪いを受けない神聖なものとして崇められていました。この期間は食事を一日一回にする(大齋)・肉類を口にしない(小齋)の2つを守る必要があります。40日間のレントに挑戦してみては? (中世民俗資料集より)

(*元の文章にあちこち気になるところがあったので、少し修正しました。小林)

MOTHER
ON THURSDAY



GETS FISH FOR HER FAMILY;
FOR THE SECOND PRECEPT IS
THAT WE SHOULD NOT EAT MEAT ON FRIDAYS.

牧師からのひと言

これは、大齋始日の説教の中にも引用しましたが、1939年にイギリスで出版された、H. A. ウィルソン司祭の「Chalk and Children」に掲載された挿絵です。

今年は2月22日(水)から大齋節が始まるので、このレントの季節をどのように説明しているのか、調べてみました。すると、魚介類だけが、この期間、食べることが許容されていたことと、その理由が書かれていました。

ノアの洪水の時に、あらゆる動物が死んだけど、海の中の動物だけは例外的に洪水でも殺されずに済んだんだろうか、と子どもの時に考えたことがありましたが、こんな説明もあることを発見しました。

(小林史明)